

SAPPORO 教区 NEWS

第12号

2009年8月21日

発行：カトリック札幌司教区事務局広報部
〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10Tel. 011-241-2785 / ホームページ : <http://www.csd.or.jp>

教皇ベネディクト16世「司祭年」を宣言

キリストのみ心の祭日の2009年6月19日から翌年同祭日の6月19日までの1年間

司祭年を迎えて

ペトロ 地主 敏夫 司教

教皇ベネディクト十六世はアルス（仏）の司祭、聖ヨハネ・マリヤ・ピアンネ神父の帰天百五十年を機会に、今年のイエスの聖心の祭日（六月十九日）から来年の同祭日までの一年間を「司祭年」と定め、神の恵みの偉大さに気づくと同時に今日の世界にあってより力強く福音を証し、キリストに倣って奉仕職に励む機会と召命への促進を求めるよう呼びかけました。

司祭とは本来、神と人間の仲介者として、人々の願いや嘆願を神に取次ぎ、神からの恵みと告示を人々に伝える役目をする人である。このような仲介者の役目はどんな人間もそれに相応しい者はいない。あのモーセでさえ、しばしば「もうこの仕事から外して下さい」と願った程です。これに相応しい方といえば、イエス・キリス

ト以外に見つけることはできない。

イエス・キリストは只一度身を捧げることで全人類の全ての罪を取り去ることがお出来になりました。しかし、世の終わりまでの全ての人々に目に見える印として恵みの効果を現すように望まれ、使徒たちを選び、この司祭職を続け、世の終わりまで全ての人々に示すようにお命じになったのです。

それ故ヘブレイ書は次のように言っています。「大司祭はすべて人間の中から選ばれ、人々のため神に仕える職に任命されています。」神に仕える奉仕者の人間性をハッキリ言います。それにも係わらず、人間である司祭を選び、召し出し「キリストの司祭職」を継承させたのは、ひとえに

全ての時代の全ての人々に神の憐れみと恵み、愛を可視的に直接感じさせるため不完全であっても人間的な教会に託された制度なのです。私たちはキリストのこのような思いに接し、神の摂りの大きさと恵みに感謝したいと思います。

人間である司祭は自分自身も弱さを身にまとい、るので、無知な人、迷っている人を思いやる事が出来、それ故、民のため、自分のためにも祈りを捧げます。しかし彼は自分自身のために祭司職を行うのではなく、人々への奉仕のため「キリストの司祭職」を引き受け、生きるよう召されています。

そしてキリストのように、その時代と生活環境の中に对应していかなければなりません。人間の尊厳、正義と平和、被造物と自然を大切に感じる感覚の中で福音の価値と神の思いと恵みを人々に説明し、感じさせる仕事を継続しなければなりません。

教会の中では頭であり、牧者であるイエス・キリストを秘蹟的に示し、キリストのことは権威をもって宣言し、洗礼・ゆるし・聖

体の秘蹟の中でキリストのゆるしと救いの犠牲を繰り返し、キリストのように自分のすべてを与え、民を一つに集めて霊の中に父なる神へと導きます。その為に自分の一生を捧げ、神の国のため全てをすてて、自由になります。

司祭はこの為、聖別と注油され、キリストの役割に自分を委ね、教会と共に、教会の中に、教会によって派遣されます。

教皇様はこの「司祭年」の告示に当たって、聖ピアンネの教えと模範を示し、「司祭である自分が人々にとっても大きなたまものであることを自覚し」感謝の中に召命に忠実に励むよう促し、ピアンネの司牧方法を学び、祈り求めるよう願っています。

この司祭年に於いて司祭たちは勿論、小教区の信徒の皆さんも神の恵みを感じると共に人間である司祭のために祈って下さい。さらに教会の使命が世の終わりまで継続するよう、若い人々の召命のため祈りと養成・支援の機会・催し等を持つよう願って私の挨拶と致します。



「司祭年」のテーマは「キリストへの忠実」「司祭職への忠実」

このことは、恩恵の完全な卓越性を示し、常に心から無償の愛に従うことを示しています。現代において、愛は「忠実」となることを思い起こさせているのです。そして、司祭職とその司牧的使命の霊的、神学的理解を深めることを、そして、特に、司祭職への召命を優先的に促進することに注意を払うことを望んでいます。また、「司祭年」は、華々しい行事というより、むしろ「神との親密性を確認する」「神と共にあることから発する福音宣教への情熱を新たにする」という生き方を見直す機会となることを望んでいます。

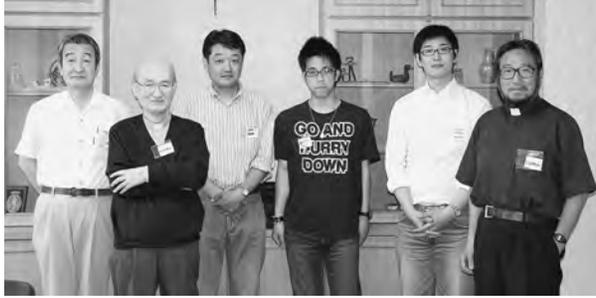
教皇は、「イエスのみ心の祭日」にサンピエトロ大聖堂で晩の祈りを司式して「司祭年」の開幕を宣し、そして、この日、良き牧者のみ心と共に鼓動していた「聖ヨハネ・マリア・ピアンネの心臓という聖遺物」がアルスから運びいれた。

「召命の集い」開催

復活節第四主日は、世界召命祈願の日（今年は五月三日で、第四十六回）

五月の連休、四月（月）と五日（火）に花川マリア院において開催。函館・宮前町と北一条からは社会人、花川教会からは大学生の信徒の三名が参加

四日の午後三時に集合して、オリエンテーションを行い、午後四時から第一講



参加者と指導司祭

話「主キリストに呼ばれて」（講師＝中江神父）、分かち合いと夕食をはさんで、午後七時半から第二講話「神学院入学手続き・生活・授業・司祭までの歩み」（講師＝新海神父）を行った。

翌日の五日には、朝の祈り、朝食のあとに、午前九時から第三講話「司祭召命について」（講師＝地主司教）、派遣ミサを行い、昼食後に解散。



ガイダンス様子

「召命の集い」に参加して

五月四日～五日、花川のマリア院で「召命の集い」一泊黙想会が行われました。

教区報で司教様が「誰でも一度は司祭の召しだしを考える。神学生になるのかは別としてお金や物が主体となっている昨今にあつて霊的なものの大切さを知ってほしい」というメッセージを読み、私も参加できるものに参加してみようという勢いで手を挙げました。一歩前に出ることはとても難しいことです。緊張も動揺もしました。しかし教皇様や司教さま方が「恐れるな」というメッセージを機会ある事に発信されていることに勇気を得て参加しました。

＝参加者の青年からの感想とメッセージを紹介＝

今回、地主司教様や召命担当司祭団は参加者が多かったと喜んで下さいまし

同じ思いの青年が数人集まり、正直とても嬉しかったです。素直に自分を表現出来る事は恵みを頂けるとだと思えました。

「キリストに呼ばれて」というテーマで、中江神父様の講話からサハリンより引き揚げた体験談・闘病生活・司祭へ召出し、そして今、両親に感謝していると、思いを伝えて下さいました。今田神父様から聖務日課を学び、新海神父様から神学校について詳しく説明がありました。

地主司教様もご自身の小さい時の話からどんな神父さんと関わりどのように自身の召命について考えたか話され、全ての人は神様からの招きを受けている。創造を計画され周りの人々をすべて準備され、その人のために一番良い条件の選びの瞬間がある。準備の上でこの人生からどんなタレントをもって、いろんな才能を自由に使いながらその人の生き方を決める。これを召命という。その時その時私の意志できめて、人間は人生をたどっているとして、人知を超えた恵みについて熱く語って下さいました。

詳しくは皆さんにもぜひ参加して聞いてもらえればと思います。

真剣に考えた一泊でした。司祭の体験や生き方は様々で、みな違う道をたどりながら呼ばれた話をじっくり聞けるのは召命黙想会ならではのです。忙しいなか司教様・神父様方には大変感謝しております。また手巻き寿司などたくさんのお馳走を用意し、清潔なシーツのもとに休み黙想会を過ごせました。シスターに感謝です。

さて今年六月から司祭年が始まりました。司祭について青年たちが真剣に耳を傾け、体験や経験を聞くよい機会が増えると思います。ぜひ全道の青年の皆さん一度は勇気を持って召命黙想会や青年活動、WYD、様々な黙想会など参加し、教会の証人になれるよう一緒に働いてみませんか。

真に力強いメッセージを頂き、神に感謝。



全道司祭会議

六月二十九日から七月一日に花川セミナーハウス開催

今年の研修は「中年司祭の危機」(ルーハン・ソフィールド S.T.M.A 著)を下に、現状の問題点等を探り話し合った。



人生をどう過ごすかを再評価する時期として特徴づけられる。』と述べ、これこそがこれら司祭に起こったことであると確信していると語っています。

すなわち、信徒の皆さんも経験する事柄なのです。聖職者ゆえに孤独に陥がちなの司祭と、自分らしさと自分の進む道を話し合うことも大切なことなのかもしれません。

そして、論文では司祭に絞って考察したというだけのことであり、修道者は師の論文を読んで、各人の経験に照らして相通じるものを感じ取ることが出来るだろうとも述べている。

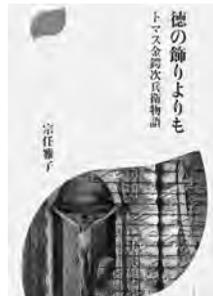
ルーハン神父は、過去三年間、司祭職を離れた多くの司祭に面会する機会を持ち、最近司祭職を離れた五十歳前後の司祭に関し考察している。面談で得られた事柄について、その原因を調査し、益々増えつつあるこの現象を食い止めるにはどうしたらよいかを論文の中で提言している。



新刊紹介

「徳の飾りよりも
トマス金鍔次兵衛物語」

(ドン・ボスコ社刊、七三五円)



トマス金鍔次兵衛神父の

一生が描かれた一冊。キリストの証しのために、人はあれほど愚直にもなり、不屈にもなれるものなのか？信仰の自由が保証されている現代の日本人の目には、その姿が破天荒にも映る。同じ神を信じる者にして、この生き様の大きな違いを、単に時代のせいだけにして良いのだろうか？

「病めるときも―病と向
き合うすべての人へ」

(ドン・ボスコ社刊、一〇五円)



結婚式における誓約の言葉(第二形式)を思い起こして頂きたい。病める側にとっても、看病する側にとっても、病めるときは逆境のときだ。だからそのときに試される。これまでの

「愛と忠実」は本物であったかと。病めるときも、病めるときこそ、神対し、また隣人に対して、私は愛したい、忠実でありたい。

司祭月例会「ミサ典礼書の改訂」学ぶ

四月二十七日、現在進行中の日本語『ミサ典礼書』改訂作業に携わっている日本カトリック典礼委員会の宮越俊光秘書を講師に勉強会が行われた。



講演する宮越講師

現在、ミサで使用されている日本語『ミサ典礼書』が、ラテン語規範版初版(Missale Romanum 一九七〇年)と、ラテン語規

準備のための三つ(式次第、奉献文・叙唱、公式祈願)の研究部会が発足し、改訂作業が正式に動き出した。さらに、『ミサ典礼書』の勉強会を重ねる公式祈願や種々の機会のミサ奉献文の試用を行い、二〇〇〇年に『ミサ典礼書』改訂委員会が発足し、本格的な改訂作業が始まった。

その間、教皇庁からいくつかの指針が出され、一九九四年に出された「第四指針」典礼秘跡省指針(ローマ典礼とインカルチュレーション)で、行き過ぎた各文化への移行を見直し、ローマ典礼書にあったものにするのが明文化された。さらに、二〇〇一年には「第五指針」典礼秘跡省指針(典礼式文の翻訳について)が出され、ラテン語に忠実に訳して下さいという強いものになった。

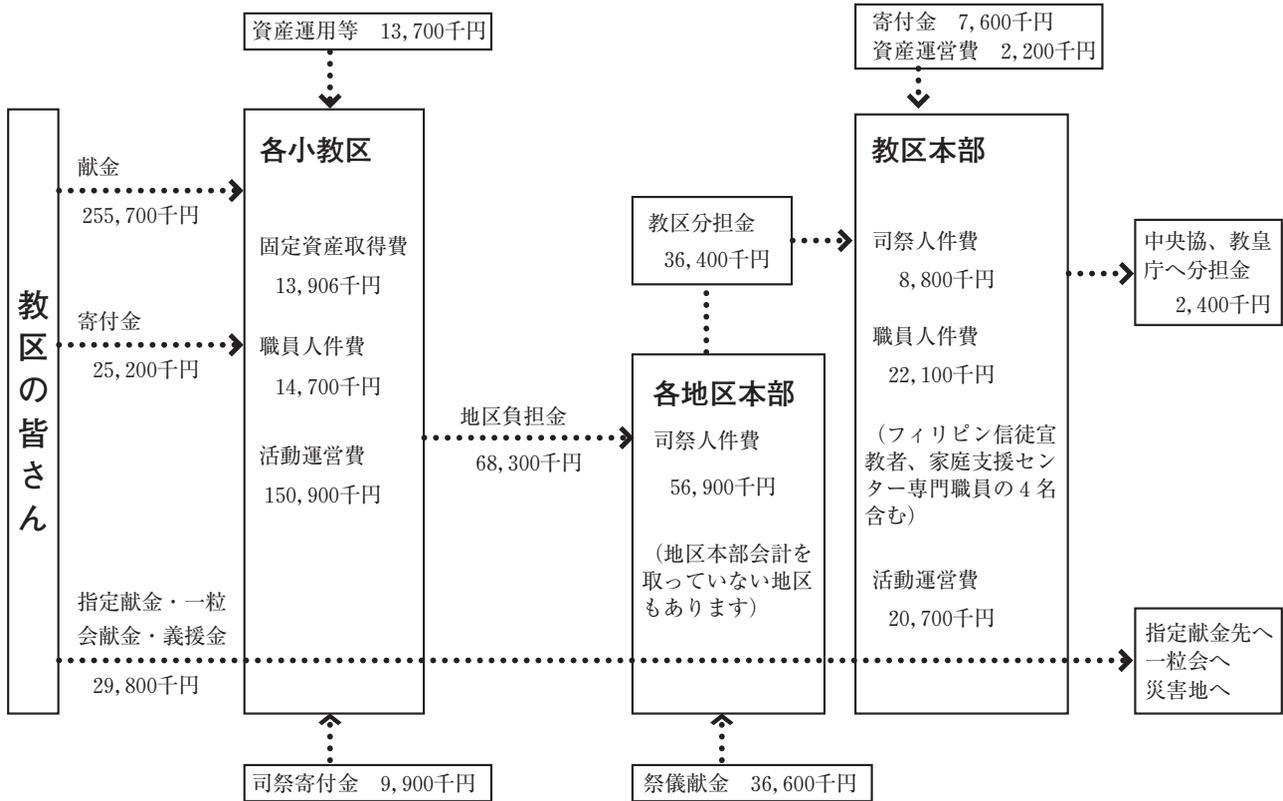


改訂作業中である、二〇〇二年には、ラテン語規範版第三版 (Missale Romanum) が出され、二〇〇五年の第十一回通常シノドスでは、ご聖体の再認識の大切さが重要と指摘され、二〇〇七年の教皇使徒的勸告『愛の秘跡』で、ご聖体の正しい理解が勧告された。そして、二〇〇八年にはラテン語規範版一部修正 (Missale Romanum) が行われ、改訂訳をやり直すことを余儀なくされている。

そのような状況の中で、二〇〇六年に『ミサの式次第・奉献文一〜四』改訂訳、『日本におけるミサの聖体拝領の方法に関する指針』を典礼秘跡省に提出した。今後鋭意努力して五年以内の決定版の『ミサ典礼書』の発行を目指していると決意を語った。

札幌教区2008年度決算概況報告

(2008年4月1日～2009年3月1日)
収入と支出の動きを図式化して報告します



二〇〇八年度 札幌教区会計報告

✠ 神に感謝

皆様方のご奉仕と献金・寄付に心より感謝申し上げます。

会計担当者の皆様には、日頃の取りまとめから、年度末の報告書作成・提出とご協力に感謝申し上げます。皆様のご協力により、管轄官庁の北海道に無事に提出し報告することができました。ここに、感謝と共にご報告させていただきます。

この度のアメリカから発生した経済危機の状況下において、皆様からの奉仕、献金・寄付金等のご協力によって、二〇〇八年度の札幌教区の宣教師活動を遂行できました。神様の恵みとみ心に感謝致します。これからも、皆様と共に、神様のみに従い歩んでいきたいと考えています。

トラピスト大修道院長に吉元邦彦師が選出される

六月二十六日午前、厳律シトー会・灯台の聖母トラピスト大修道院で大修道院長の選挙が行われ、フランシスコ吉元邦彦神父(五十一歳)が選出(任期六年)され、着座式が行われた。九月二十三日に大修道院長祝福式が行われる。吉元大院長様のためにお祈り下さい。

【吉元大院長略歴】

一九五八年二月 熊本県に生まれる
一九八八年 大分トラピスト修道院入会
二〇〇六年九月二十九日 大分トラピスト修道院にて司祭叙階
二〇〇八年六月 当別トラピスト大修道院委任院長
二〇〇九年六月二十六日 当別トラピスト大修道院長に選任され着座

えぞキリシタン殉教370周年記念ミサと資料展

雨天が続いたにもかかわらず三日間で約八〇〇人が来場

一九五四年に函館市立図書館で松前藩古文書『福山秘府・年歴部巻の四』が発見され、それには「是歳有幾吉利支丹宗門制禁、東部大澤刃首其宗徒男女都五十人、残党六人於西部日市邑（現在のノ国石崎）、於金山（千軒岳中腹）刎首餘党五十人、宗徒都百六人也」と記されています。これが一六三九年（寛永十六年）の「えぞキリシタン殉教」の出来事である。

これら殉教した人々の言行や職業、名前など裏づけとなる資料が乏しく、昨年十一月の列福には列せられなかったが、北海道の地で殉教（証し）があったことは事実であり、現代に生きる私たちは三七〇年前の「証し人」に倣い、キリスト者としての生き方を見つめなおす良い機会となったことだろう。

巡礼登山ミサは、残念ながら雨天のため麓でのミサとなった。



記念ミサを捧げる地主司教と司祭団



西 暦	えぞキリシタンと北海道の宣教	日本の主な教会史
1549		フランシスコ・ザビエル 鹿児島に上陸
1557		アルメイダ師ハンセン 病院大分に開設
1575		日本を含むマカオ司教区設立
1587		秀吉による伴天連追放令発布
1596		「日本26聖人」殉教
1612	江戸幕府の迫害により、東北の信徒えぞ地に逃れる	家康による伴天連禁教令発布
1618	アンジェリス師 松前に渡航	キリシタン宗徒50人 京都にて火刑
1619		
1620	カルワーリユ師 松前で初ミサ	アンジェリス師他50人 江戸にて火刑
1623		カルワルホ師他16人 仙台にて水責刑
1624		
1638	松前公広 幕府より取締強化命じられる	
1639	松前大沢50人、千軒金山50人、上ノ国石崎6人の106人が処刑	
1924	当別トラピスト 院長プーリエ師 千軒岳で初のミサ	
1959	函館地区千軒岳巡礼登山開始	



青年運動会開催

教区内の青年が集い開催

身体を動かして親睦交流をはかると同時に、みこたばを考え、わかちあいを行う集い。今後、隔月で開催予定。

第一回目は、四月二十五日十三時～二十六日の一泊二日。参加人数は十八人。担当司祭の森田健児神父の指導で、月寒教会をベースに開催。

「企画運営の青年談」

今回は「運動会」ということで、しっぽ取りや鬼ごっこ、チャンバラ等、大

人になってからはまずしないであろう遊びを中心に、青年同士との交流や親睦を図る目的で行いました。参加者からは「疲れた」としか出なくなるほど走り回ってもらいました。しかし、疲れが回復してきてからは、やっと「疲れたけど、すごく楽しかった」という感想が出てきました!!

その後、夕食を食べ、祈りの時間をとり、皆で歌を歌い、聖書を読み、その事について考え、自分自身に関して考える時間を取つたりと、ゆっくりとした有意義な時間を過ごすことができました。



青年たちの活動報告

青年 エクスプロージャー

五月、連休を利用して六人の青年たちと山口県下関と岩国、そして韓国・釜山を訪ねた。旅のきっかけは一年半前、札幌働く人の家で青年たちと企画したドキュメンタリー「消えた鎮守の森」上映会（西山正啓監督）。この映画で、青年たちは米軍再編に揺れる町、岩国の存在を知った。これ以上の基地強化を望まないと意思表示した市民の活動と、その先頭に立つ井原勝介前岩国市長の存在は青年たちの心に深く印象付けられた。それ以来、岩国は青年たちの関心ごとの一つとなり、映画を観ていない青年たちもが知るところとなっていった。

最後に訪れた岩国では、ちょうど恒例の基地開放日であり米軍基地を見学した。案内役は前岩国市長井原氏が引き受けて下さった。基地までは歩いて行った。そう、基地は人々の生活圏とピツタリ隣接し、当日、ゲート周辺はたくさん祭りの様相であった。



本郷村にて

ゲート前の立派な石製の大看板には「米国海兵隊岩国航空基地」とあり、その前で同世代の兵士たちと一緒に記念撮影をする若者たちがいた。小さな赤ちゃんからお年寄りまで、ありとあらゆる人でごった返す基地の中を、井原さんについてまっすぐに滑走路へと進んだ。途中見かけた長い行列は、子供を戦闘機の操縦席に座らせ米兵と記念撮影をする列だった。翌日の山口新聞には二七・五万人の人数とあった。岩国市の人口は一四・九万人である。

私たちの頭上で、轟音と共に戦闘機のショーが始まった。ある戦闘機は空中でピタリと停止し、その後黒い機体をゆっくりバックさせ三六〇度方向転換した。今にもこちらに向かつて飛んできそうな不気味さに、イラクやパレスチナで空爆の犠牲になったたくさんの人々が最期に見たものを想像してしまい、戦闘機によるショーはとても楽しめるものではなかった。

夕方、市内の愛宕山跡を訪ねた。基地の沖合い移設用の土砂を取るために削られた山は、東京ドーム二十五個分の広大な茶色の地表むき出しの痛々しい姿になっていた。今度はここに米軍住宅を建てる交渉が水面下で進められているという。「愛宕山に米軍住宅はいりません」と書かれた黄色いのがらが家々の塀に掲げられていた。削られた山から移設された真新しい神社の境内から、基地の喧騒を見下ろした。すぐ左手には瀬戸内海に浮かぶ宮島がはっきり見えた。穏やかな瀬戸内海と、かつて桜の名所として人々が愛した愛宕山はもうない。

岩国市郊外の本郷村へと案内してくれた。昔話の絵のような村で、まるで竹取の翁のようなご夫婦の笑顔に迎えられホッとした。高い丘から村を眺めながら村での暮らしについて聞いた。それは何を選び育めばいいのか考えさせられる旅の締めくくりとなった。

各地で私たちを受け入れて下さった方々の協力があっての充実した旅であった。出会った方々は、日々、自らの選びと決断の上に生きていた。そのたくましさややさしさにはたまらない魅力を感じた。

また共に旅をした七人はステキな仲間になった。ファミリーや列車での旅は、互いに分かち合い友情を育てるにはちょうどいいスピードであったのかもしれない。桜が満開になりかけた新千歳空港で、私たちは互いにしっかりと握手を交わし合って別れた。アジアの平和を意識し、行動する人々の仲間になりたいなど願いながら。

鳥居明子(札幌JOC協力者)

【主な旅の行程とお世話になった方々】

①地理的見地から下関を見る



釜山の再会

る(重工業の発展、日本の玄関口)、案内…林神父(イエズス会) ②関釜フェリー(大陸への侵略、強制連行に使われた航路体験) ③釜山でイエスサリ共同体との交流(清貧生活を実行する青年たち中心のカトリック団体が数年前より交流を続けている) ほか ④歴史の見地から下関を見る(大陸との関係、強制連行)、案内…欽野保雄氏、多文化共生センター北九州のお二人 ⑤米軍再編に揺れる町岩国の実態を見て感じる。案内…井原勝介氏、岡田久男氏ほか。

カリタス家庭支援センター開設五周年を 祝う

五月十六日(土)、北一条教会で記念ミサと記念講演。生きる喜びと、神様の愛を感じる行いを、さらに一歩前進させよう

午後十時から地主敏夫司



講演する谷内神父

「虹の会」って

点字プリンターを札幌カリタスからの援助と借入金で購入!!皆様の援助をお願いします

皆さん、虹の会をご存知でしょうか?「視覚障がい者と共に歩む会」として活動を始めて今年で十年になります。

主な活動は、点字本(点訳部)と録音テープ(音訳部)による情報提供です。運営は会員からの会費と皆様からの寄付で行われています。

発足した十年前とは比べ

ものにならないくらい視覚障がい者を取り巻く情報提供は進んでいます。一般図書は各地の点字図書館から、点字本、テープ・CDを借りることが出来ます。

以前はテープでしたが、現在はほとんどCDに変わっています。虹の会は、主に教会で健常者が手にする



点字プリンターで印刷

「聖書と典札」「札幌教区NEWS」「カリタス通信」「ともに」「小教区報」などの点訳本、録音テープを製作しています。

少し詳しく説明します。まず点訳部ですが、今年、点字プリンターを新しくしました。元のプリンターは十年使用して故障が多くなり、修理費や点訳本製作に

時間がかかるようになったからです。それだけ利用した証拠でもあります。前のものとは違って、新しいプリンターは表裏を一度に印刷できますので印刷時間が半分で済むようになりました

た。例えば、「聖書と典札」

四名分の印刷に一日かかっていましたが、今は半日で済みます。現在、ご厚意で北広島教会に置かせて頂いています。プリンターの音は結構うるさいので、教会に迷惑がかからないようになるべく人がいない時間を見計らって印刷しています。

昨年は「葬儀のしおり」を点訳しましたので、必要な方には貸し出すことが出来ますのでご利用下さい。

次に、音訳部です。前述のように現在は、テープからほとんどCDに変わっていますが、虹の会ではテープのままで。CD録音するためには、費用も場所も必要なので、現在の虹の会では残念ながら出来ません。

音訳の内容は、点訳本と同じですが、その他に「テープ雑誌・シャローム」(毎月)、「神父様の黙想会の講話」や「講演会の講話」(録音できた時)、個人的に希望する本なども音訳しています。音訳部は、テープ、その他の機材、備品の保管、テープの発送などを、ご厚意で北十一条教会をお借りして行っています。

今までは、視覚障がい者

の方々のためだけにテープを作ってきましたが、現在の高齢化に伴い、提供する対象を広げて生きたいと思っています。例えば、主日のミサに与れない方(病気の方、高齢で読むのがつらい方、出かけるのが大変な方、色々な理由で家を空けられない方...)などに利用していただければと願っています。各個人にテープ

を送るだけの人手も資金も

ない虹の会です。各小教区にお送りし利用して頂けるようにと考えています。虹の会もご多聞に漏れず会員は高齢化し、会員数も減少しています。音訳、点訳に興味のある方、虹の会をのぞいてみませんか?どうぞ宜しくお願いします。

音訳部 岩崎 矩子
〇一一一七五八―四八五八 (十八時以降)

日本 JOC 60周年 !!

1949年、北九州の小倉で始まった日本 JOC は、今年創立60周年を迎えました。これを機に日本 JOC の歩みを振り返り、これからの力にしたいと現役 JOC メンバー中心に記念行事の準備を進めています。いつも応援して下さいの皆さん、OB・OGの皆さん、是非一緒に祝いしてください。

■お祝いの会(式典とパーティー)

日時：9月13日(日)14:30~18:00

会場：月寒教会と教会中庭

■JOC 記念館

日時：9月9日(水)~15日(火) 毎日12:00ころより

会場：札幌働く人の家

写真や思い出の品々、メッセージで60年の歩みを紹介する記念館を1週間限定でオープンします。展示品の提供などご協力いただける方を募集中です。

■JOC だより -60周年記念号- 発行

各地域の JOC の歩み、現役 JOC メンバーたちの声を掲載した特別号です。7月上旬発行。

ご希望の方はどうぞお申込みください。

*お問合せは全て Tel/Fax 011-859-2567

札幌働く人の家 鳥居まで。

近野巨神父と井戸井 栄神父の追悼ミサが 七月五日(日)北一条教会で行われる

両師は、昨年の七月に相次いで天に召されたが、奇しくもお二人は、同じ時に北一条教会で司祭叙階の恵を受け、二人はそれぞれの信念に従った独自の宣教の道を歩まれた。

共に、両師は持病を抱えて健康的には恵まれなかったが、各々が目指した宣教の道を歩むことが出来たのは、神様のみ旨がそこに働いていたのだろう。



近野神父は、哲学を専攻し、六十五歳で退職するまで大学で教鞭をとり、学生と係わることでイエスの教えを広めるという宣教の道を歩まれた。

そして、井戸井神父は、

教区の風

司祭より冒険的生活はない (カトリック生活の グリム神父に聞く) を読 んで

もっと魅力ある生き方を

まずグリム神父様は、「大きな問題として、聖職者の生活が、若者に魅力がなくなっているのではないか、ヒロイズム生活に、見えていないのではないかと言うのが私の考えです。」と書き出している。小教区の信徒一八〇人だけでなく、小教区が担当する地域内の人々をも担当していると考え、司祭であるからこそ、冒険を求める少年のように奉仕できるし、貧しい人や社会問題に関わって、いろんな人を神に導くことできる素晴らしい「アドベンチャー」を味わうことが出来る」と述べている。

「悪音」に悩んでいるか

そして、今の日本の教会は内向き(高齢化は進み、召命は少ない、経済も悪化…と嘆く)で、いくら教会内部の問題を見ても活気は

戻らないと語り、教会は福音を伝えるところですが、実際は「悪音」を専門とするところだと語っています。なぜなら、イエス様が目の悪い人の足ではなく、目を癒されたように、福音を伝えるには、今の社会の悪音がどこにあるかを見極める必要があるということである。

例えば、カトリックの幼稚園・学校、病院いろいろありますが、開設したその当時は、日本の悪音に因應するためのものでした。しかし、今でも悪音でしようか…?と疑問を投げかけている。時代と共に「悪音」は変化するので、今の「悪音」を的確に捉え、福音を述べ伝えていかなければならぬと言っている。今の「悪音」は何でしょうか?

司祭たちの熱意を守って

どうやって、神学校や修道会に入った時の熱意を守るか? あそこには教会の施設があるから行けと言われるか、お前の熱意・チャレンジはここにあるから行けと言われるか。建物管理を任されるのでは、せっかくの熱意もつぶされてしまう。とグリム神父様は語っている。

ます。そして、教会の縦社会と、日本の縦社会が合いすぎて、縦と横のぶつかり合いで新しい何かが生まれていることが足りないとも語っています。

交通手段が発達した今、当時のままの数の教会建物がそこにあるから任命されるのでは本末転倒と言うことだろうか。

日本の教会の希望は信徒

「日本の教会の黄金の日々はいつ?」 「司祭の居ない時代」(笑)と答え、司祭のいないところで二百年も信仰を守ってきた国は、他にはないだろうと語り、日本の教会の希望は信徒にあると語り、司祭も信徒に負けないようにしないといけないと語っている。

世の中を怖がる人のために

世の中を怖がる人は、日本にも少なくない。これは、私たちが信者のチャンスと語り、「常に喜びなさい。重

ねて言います。喜びなさい」(フィリピ四・四)とパウロも繰り返し言っているように、世の中を明るく歩む人は、だれかの希望になるかもしれないからです。だって、私たちは救われ、神に愛されたのです。これ以上何も待つことはない。足りないものなどないと結んでいます。

私たちは、今、神に愛されたことに感謝し、一歩一歩着実に前進する時なのでしょう。(H)

訃報

神様のみもとでの安息をお祈り下さい。

■聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

◇Sr. Mサルヴァートル

小笠原 綾子

青森市と一関市の児童福祉施設で家庭に恵まれない子供たちを母の心でお世話。一関の施設長、院長を



務め、病人・お年寄りを見舞ったり幅広い奉仕を行った。二〇〇九年三月に社会福祉の分野から退いた後は、花川マリア院に移り、その二ヶ月後に帰天。享年七十二歳

【略歴】

1936年8月26日 江差町生まれ
1956年12月24日 富岡教会で受洗

1966年3月24日 入会

1969年1月11日 初誓願

1976年8月12日 終生誓願

2009年5月27日 帰天

◇Sr. Mカタリナ

目黒 博子

函館、紋別、旭川等の支部に派遣されたが、修道生活の多くの年月は、本部修道院と札幌寄宿舎マリア院で奉仕。寄宿舎マリア院では長年院長を務める。若い



頃から「よい臨終を求める祈り」を毎日欠かさずことなぐ祈り、いつものように車椅子で朝の祈りとミサに与り、皆と朝食を共にし、自室に戻った時に、突然神様のもとに召された。享年九十歳

【略歴】

1918年12月10日 旭川市生

1933年12月24日 北十一条教会で受洗

1940年8月12日 入会

1943年8月12日 初誓願

1949年8月12日 終生誓願

2009年6月8日 帰天

編集後記

司祭年を中心に掲載してみました。小教区へ「司祭年開催の告示」の冊子と、昨年行われた列福式のDVDをお送りしましたので、ご活用頂ければ幸いです。

司祭団・修道者・信徒が一緒になって「奉仕者」「仕える者」のあり方を見つめなおすよい時期ではないでしょうか。(編集子)